

具体的な実践事例

第6学年「聴いて、歌って、雅楽の世界を味わおう」

1 本題材における音楽の見方・考え方

本題材における音楽の見方・考え方は、「雅楽を聴いたり、表現したりする際に感受する曲想やイメージを楽器の音色や音の重なりなどから捉え、自身の生活や文化などと関連付けながらそのよさを実感すること」である。具体的には、GTによる雅楽「越天楽」の演奏から、楽器の音色や重なりから生まれる迫力を感じ取り、その音楽が生まれた当時の生活や文化などを知った上で、その学びを歌唱や楽器などの表現に生かしながらそのよさを実感していくことである。そしてそれは、音楽的活動を通して、曲想と音楽の構造などとの関わりを理解するとともに、音楽表現への思いや意図をもって表現を工夫する中で必要な技能を身に付ける創造性につながっていく。

2 本題材で重視する学びの文脈

本題材では、雅楽「越天楽」「越天楽今様」の楽器の音色や旋律、音の重なりなどを味わいながら聴いたり、それらが生み出すよさや特徴にふさわしい歌い方を工夫して表現したりすることができることをねらいとした。GTによる雅楽の生演奏を聴いたり、感じ取ったことを生かして実際に自分たちで表現してみたりすることで、我が国の音楽のよさと自分のイメージや感情、生活と文化とを関連付けたり、そのよさを実感したりできると考えたからである。

我が国や郷土の音楽を学ぶ際、児童の我が国や郷土の音楽に対する興味・関心が低いことや、それを自分の生活と結び付けて考えたりすることができず、どこか遠いものと捉えることが課題であった。そこで本題材では、前述したことを踏まえ、日本伝統音楽のよさや面白さを体験的に捉える活動を取り入れながら、文化的側面、社会的側面の両面を重視していくこととした。

3 授業の実際

題材の導入段階（第1時）においては、4月に子供たちと話し合った「音楽科で学んでいきたいこと（学びの地図）」を想起した。その中で、「日本の楽器や音楽について知りたい」という思いをもっていたことから、雅楽「越天楽」を紹介し、曲の鑑賞を行った（資料1）。



子供が音楽から感じ取ったこと

曲想	<ul style="list-style-type: none">○ ゆったりとしていて落ち着きのある曲だな。○ 神々しく、お祈りしたくなるような曲だな。○ 迫力はあるが、ずこし退屈な曲だな。
要素	<ul style="list-style-type: none">○ 同じような旋律が繰り返されている。○ 様々な音色の楽器が重なりあっている。○ 決まった拍ではなく、速度もゆっくり。

【資料1 話を聞く子供と音楽から感じ取ったこと】

子供が音楽から感じ取った曲想や要素をまとめていくと共に、その音楽が生まれた生活や文化の背景についてGTから話を聞くことで、子供は曲想と生活や文化を結び付けながら音楽を聴き、気付きを発言していた。

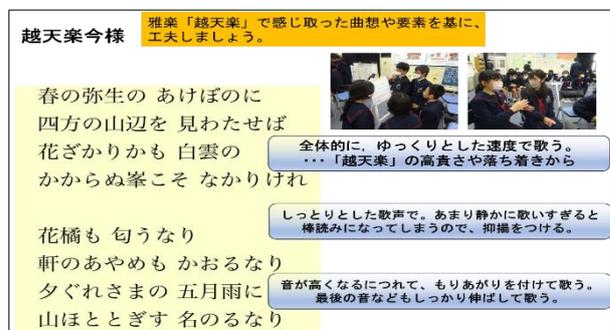
題材の展開段階（第2・3時）においては、雅楽「越天

楽」から感じ取った曲想や要素を生かしながら、思いや意図をもって自分なりの「越天楽今様」の歌い方を工夫したり、歌詞をつくりかえたりしながら表現する活動を設定した。鑑賞で感じ取った雅楽「越天楽」に合う歌い方の視点をもつために、教師による比較聴取の時間を設定したり、考えを共有し、学びを蓄積していく学習スライドの作成を行ったりした（資料2）。

T：（「越天楽今様」を弾むように歌う教師）
C1：先生の歌い方は弾むように歌っているから、**雅楽「越天楽」のゆったりした曲想**には合わない歌い方だと思います。
C2：**神に献げる音楽なのに**、その歌い方だと合わないと思います。歌う相手を考えて工夫した方がいいと思います。

【資料2 歌い方について交流する様子】

子供たちは、雅楽「越天楽」で感じ取った曲想や「越天楽今様」の五線譜を基に、ゆっくりとした速度や音の伸ばし方を工夫し、表現することができた（資料3）。



越天楽今様 雅楽「越天楽」で感じ取った曲想や要素を基に、工夫しましょう。

春の弥生の あげぼのに
四方の山辺を 見わたせば
花ざかりかも 白雲の
かからぬ峯こそ なかりけれ

花橋も 匂うなり
軒のあやめも かおるなり
夕ぐれさまの 五月雨に
山ほととぎす 名のるなり

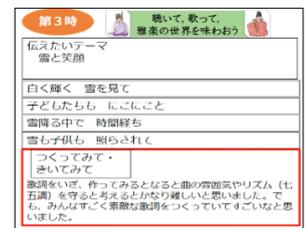
全体的に、ゆっくりとした速度で歌う。
…「越天楽」の高貴さや落ち着きから

ゆっくりとした歌声で、あまり静かに歌いすぎると
つまみになってしまうので、抑揚をつける。

音が高くなるにつれて、もりあがりをつけて歌う。
最後の音などもしっかり伸ばして歌う。

【資料3 子供たちの歌い方の工夫の一部】

歌詞についても、当時の人が感じた雅楽「越天楽」のよさや曲想を生かし、それらに合う歌詞を考えながら歌い、終末段階での発表を楽しんだ（資料4）。



第3時 聴いて、歌って、雅楽の世界を味わおう

伝えたいテーマ
雪と笑顔

白く輝く 雪を見て
子どもたちも にこにここと
雪降る中で 時間経ち
雪も子供も 照らされて

つくってみて・
書いてみて

歌詞をいざ、作ってみるとなる曲の雰囲気やリズム（七五調）を守ると考えるとかなり難しいと思いました。でも、みんなはずっと素敵な歌詞をつくってすごいなと思いました。

4 考察

【資料4 つくりかえた歌詞】

題材を通して、雅楽が生まれた生活や文化について知り、その中で音楽を聴いたり、表現したりすることで子供が創造性を発揮する姿が見られた。それは、GTからの話を生かして表現を意欲的に工夫したり（資料2や資料3）、歌詞をつくり出したりする姿（資料4）からわかる。よって、生活や文化などの音楽の背景との関わりについて捉え、それらを生かして鑑賞や表現に取り組み、そのつながりについて考える題材構成は、音楽科の資質・能力を発揮する上で有効であったといえる。課題としては、歌い方の工夫が、楽譜からの情報のみで終わってしまったグループがあった点である。文化について他教科との関連を図りながら、子供が音や音楽から感じたことやGTからの学びを多様に生かし、自分なりの「越天楽今様」をつくる、またその工夫の視点を焦点化するなどして活動を取り組むことで、より創造性を発揮する子供の姿が期待できると考える。